

メルジオフスキ教授講演会参加記

丹下栄

2009年11月21日、「カロリング帝国における政治コミュニケーション：文書形式学の視点」と題して行われたマーク・メルジオフスキ教授の講演（慶應義塾大学日吉キャンパス）は、歴史学の「いま」が抱える問題系を指摘する、多くの示唆に富むものであった。カロリング期の文書をいくらか扱ってきた者として、いくらかの感想めいたことを書きつけておきたい。

まず印象に残ったのは、文書形式学、ないしはディプロマチックという名でかつてはほぼ了解可能であった「学」をめぐる現在の見取り図が、それ自体の歴史的変遷とからめつつ明確に提示された点である。それをいささか乱暴に要約するなら、原本と写本、文書形式の遵守と逸脱といった参照軸が二項対立的にはなく、文書実践のあり方を示すパラメータとして扱われる傾向がますます強くなってきたこと、そして文書実践そのものについても、それを作成、利用、保管というようにステージに分けて個別に分析するのではなく、それらの総体として、文書に関わるすべての者がとり行うコミュニケーション行為として捉えるようになったこと、とでも言えようか。すなわち、文書形式と実際のテキスト文言との距離は、かつてのように単に形式を遵守する程度、あるいは文書実践の「真摯さ」の度合いを量るためにではなく、同時代の社会が文書に対してどのくらい関心を持っていたのか、また発給者と受給者との力関係を量るために用いられるようになる。言い方を変えれば、文書はそれ自体、発給者・受給者の関係（力関係・交渉・合意形成）、さらには彼らと社会との関係を反映した、コミュニケーションの産物であり、文書形式からの逸脱は可能ならば無視すべき墮落ではなく、それに着目することで様々な歴史的情報を引きだせる鉱脈である、とされるのである。

もう一つ印象づけられたのは、「文書」を、文言、支持体、さらには文字飾りや挿絵等が一体となった「テキスト」として捉えようとする志向である。「文書」の中核をそこに書かれた文言、あるいはそれが伝えようとした情報に置き、その他の要素（支持体等々）をその中心的情報（それが存在すると歴史家が仮定し、それに接近しよう努力を重ねてきた）を引きだすための補助的情報として扱う方法は、すでに遠くに引き離されている。教授は講演で、この傾向を極端なまでに押し進めた、「文書をポスターと見なす」動向にも触れた。それはいくらなんでもやりすぎとしても、しかし文章だけでなく、造形、音響、しぐさ、等々をすべて「テキスト」として捉えるべきこと、そしてあらゆるテキストはそれ自体で完結した「閉じられた世界」としてはとうてい存立しえないこと、を教授ははっきりと（いくらかの痛みとともに）認識しているように見受けられた。

ここで想起されるのが、1982年にジェニコが来日して行った一連の講演である（レオポール・ジェニコ[森本芳樹編集]『歴史学の伝統と革新。ベルギー中世史学による寄与』九州大学出版会、1984）。すでにそのときジェニコはオリジナルを頂点とした写本のヒエラルキーを批判し、「原本」と「写本」のすべてを、それぞれが独自の意味を持つ（同時代にとっても後代の歴史家にとっても）ヴァージョンとして対等に扱うべきこと、史料批判において文言以外のさまざまな要素の検討（ジェニコはとくに、コディコロジーの重要性を強調していた）が不可欠であることを力説していた。こうした考えはいまや多くの歴史家の共通認識となったかに見える。ジェニコの先見の明には感服するしかない（つけ加えるならば、史料のデジタル化に関しても、彼の「一見ご都合主義にも見える戦略の正しさは、ハード・ソフト両面にわたる情報処理能力の飛躍的進化によって証明されたと言える）が、ここで見逃してならないのは、テキスト、書き手、読み手、三者の関係のとらえ方が劇的に変化したことであろう。伝統的な考えによれば、テキストはなによりもまず書き手の意図を直

接に反映している（すべき）ものであった。読み手のなすべきことはテキストから書き手の意図を文字通り「読みとる」ことであり、「メディア」としてのテキストの価値は、書き手の意図を歪みなく読み手に伝えられる性能を持っているか否かにかかっていた。そしてまた、この考えに立つ限り、書き手が自ら作ったテキストである「オリジナル」が他者によって書き写された（しばしば過失・故意によるテキストの改変を伴う）「コピー」よりも高く評価されるのは当然であろう。

しかし、この考え方は現在大きく揺らいでいる。歴史学に限らず、ひろく「テキスト」（最も広い意味での）を扱う研究領域において、研究者の関心は「書き手は何を書こうとしたのか」以上に「テキストが読み手にいかに読まれたか」に向けられている。「美術にせよ文学にせよ映画・演劇にせよ、あらゆる種類の『作品』に関し、その解釈は無限に存在し得るということ、言い換えれば『解釈』をのぞいては『作品』は存在しないということ、これは現在読むに値する作品解釈理論の共通の前提となっていると言ってよい」（鈴木杜幾子「美術言説のオルタナティヴを求めて——序にかえて」鈴木杜幾子、馬淵明子、池田忍、金恵信編著『交差する視線 美術とジェンダー2』ブリュッケ、2005、p.7）。この前提を、コミュニケーション手段（の1つ）として文書を捉えるというメルジオフスキ教授の構想もまた共有しているといわねばならない。「特許状は私文書と同様、ある社会的なコミュニケーション過程の一部でありました。そしてこの過程においては様々なメディアが活用され、文字、言葉、象徴、そして儀礼的な要素が絡み合い、一つになって法的安定性を作り出したのです」（津田拓郎訳）。そうであれば、史料の内層批判・外層批判といった二分法も（そのような作業がそれ自体としては依然として不可欠であるとしても）、さらには「テキスト・コンテキスト」という区分も、その存在意義は限りなく希薄となるのだろうか。こうした動向は歴史学が他の多くの「テキストを扱う」「学」とともに進んでいることを明らかにするが、しかし同時にそれ自体、「制度」としての歴史学を根底から揺さぶっているようにも感じられる。講演のなかで教授がさらりと触れたドイツの大学における「合理化」（むしろ日本で使われている意味づけで「リストラ」と言うべきか）の現状（惨状と言いたいところだが）を「歴史学」の揺らぎと重ねあわせてしまうのは偏見に過ぎないのだろうか。

しかし絶望を語るのは早すぎる。教授の講演は、歴史学もまたテキストを扱う学たる資格を十分に持つこと、そしてその資格にふさわしい果敢さをもって困難に果敢に取り組んでいることを明らかにした。教授のジッケルへの言及は、感謝と敬意を秘めた別れと新たな出発の挨拶に聞こえる。その挨拶は当然、私たちがおぼつかなくも歩を先に進めることをつよく促すものでもあった。